

「授業の達人」養成中

東京理科大学教員志望学生に実践指導

東京理科大学は、専門知識だけでなく、十分な指導力を持った教員の養成を目指して、教員志望者向けの授業を工夫している。

「起立。今日はムラサキイモで、酸性とアルカリ性について勉強します」

学部3年生が中心の「理科指導法」の講義。担当の川村康文教授は元高校の物理教師で、実験授業の「達人」として知られているが、この講義では学生に

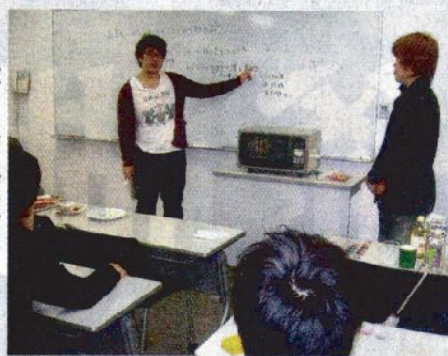
交ざって座っている。教壇に立つのは学生の一人だ。

先生役は、事前に授業の内容を考え、実験道具も準備する。

前半は、大学院修士課程2年の松本あずみさん(26)が、ムラサキイモを原料にした試薬で、6種類の液体を色分けする実験を学生に行わせた。

「結果がはつきり出て手順も良かった」「コップにラベルがないので種類を間違えやすい」。終了後は全員で感想を述べ合う。

後半は、理学部2年の池田涼さん(20)が、電子レンジでポップコーンを作り、水蒸気の働きやレンジの原理を教えた。「板書の使い方が分からなかった」



電子レンジとポップコーンを使った模擬授業を行う学生

反省する池田さん。川村教授は「二つテーマがあるので、先に分けて説明した方が分りやすかった」と助言した。

この模擬授業は、教育実習で教える機会がない学生に、実践を積んでもらおうと今年から始めた。

八並光俊教授(教育心理)は「大学の教職科目は座学中心。各教科の内容は教えて、教え方は学生任せだった。大学はもっと現場に即した授業を提供するべきだ」と強調する。

同大も、高校や中学の理科や数学の教員を多数輩出しているが、実践的指導ができる教員は多くない。そこで文部科学省の

「質の高い教員養成推進プログラム」に応募して、教員養成課程の改革に取り組んだ。

川村教授をはじめ現場に精通した教員を中心に、全国の理数系の授業の達人を招いて連続セミナーを開いたり、卒業生の教員のネットワーク作りに取り組みだりしている。今年から「数・学・授業の達人」大賞を設け、全国の中学、高校の教員の授業をビデオで審査、表彰することにした。

川村教授は「教職希望の学生に実践的なノウハウを身につけさせ、教育現場を変える人材を育てたい」と話している。

(藤田勝)